

新防除技術確立へ共創プロ

土壌燻蒸剤の削減狙う

バイエルクロップサイエンス

農薬の環境負荷低減に力

バイエルクロップサイエンス（東京都千代田区）は、環境負荷低減に向けた取り組みを強化する。早期に新防除技術の確立に向けた共創プロジェクトを立ち上げる。農薬および資材、関連企業と組んで、農薬使用量（リスク換算値）の約50%を占める土壌燻蒸剤からの代替技術を確立させる。土壌燻蒸剤と新防除技術を隔年で使用することで半減を実現する考えだ。併せて効率的な農薬散布を実現する「水田雑草テララメイド防除」や、箱粒剤と比較して薬剤使用量を90%以上削減できる水稲種子処理技術などを普及させ、環境負荷低減を図るとともに、農家の収益力向上にもつなげる。

分を代替技術に置き換えれば50年の目標を達成できるとしている。

ただし「土壌燻蒸剤は、非常に重要な剤なので全部置き換えるのは極端な話（仁木理人執行役員マーケティング本部長）であることから、土壌燻蒸剤と新防除技術を隔年で使用することにより土壌燻蒸剤の使用量、ひいては化学農薬の使用量を削減につなげる考え

だ。

年初から新防除方法の確立を目指す共創プロジェクト「Soil Health Project」を本格的に始動する。

「仁木氏」と強調する。生物農薬メーカーやスタートアップなどの共創も視野に入れる。

さらに、環境負荷低減および農薬使用量削減につながる有力ソリューションとして水田雑草テララメイド防除があり、現時点では、この取り組みの要となっている。水田雑草テララメイド防除はデジタル技術により、ほ場に合った除草剤

の有効成分を適切な量・タイミングで散布し、防除効果を最大化できる。農薬使用量の適正化、環境負荷低減、農家の収益力向上を図れる。

23年に実証を開始し、

24年は全国の農家でトライアル導入を進めてきた。これを踏まえ25年は本格的な採用活動に力を注ぐ。大島美裕社長は「水田雑草テララメイド防除を基軸にして共創を推進し、結果的に生産者から消費者までつながる輪を形成していきたい」と強調する。

加えて、水稲種子処理技術「バイエル シードグロース」を環境負荷低減に関する取り組みの一つに挙げる。シードグロースも用いれば一層、使い勝手がよくなる（大島

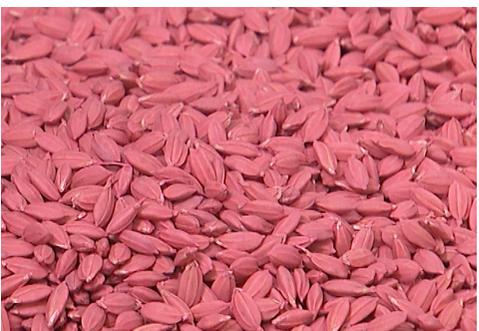
社長）という。あらかじめ種もみに種子処理剤と種子被覆剤をコーティングすることで防除効果を付与し、種まき後の防除作業を簡略化できる。箱粒剤と比較して薬剤使用量を90%以上削減できる。散布量を適正化し、環境負荷低減、農家の収益力向上を図れる。

生物農薬やバイオステイミュラント（BS）も有望視する。グロバルで実績のある製品を日本市場のニーズに合致するかを見極め順次、市場投入を検討していく。



大島社長

農林水産省は「まどりの食料システム戦略」を進めており、2050年に化学農薬の使用量をリサイクルで50%低減する目標を掲げる。19年時点です壌燻蒸剤が約50%を占めることから、この部



種子処理後の様子。薬剤使用量を大幅に減らして環境負荷も低減